北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

コロナ禍と緊急事態宣言下における高校生の学校生活と美術科の授業に対する認識について

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2023-08-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大島, 生己, 李, 知恩
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000008

北海道教育大学紀要（基礎研究編）第74巻　第１号　　令和５年７月
Journal of Hokkaido University of Education (Basic Research) Vol. 74, No.1　　July, 2023

コロナ禍と緊急事態宣言下における高校生の学校生活と美術科の授業に対する認識について

大島　生己・李　　知恩*

北海道教育大学大学院教育学研究科

*北海道教育大学札幌校デザイン研究室

High School Students' Perceptions of School Life and Art Class under the COVID-19 Pandemic and Declaration of a State of Emergency

OSHIMA Ibuki and LEE Jieun*

Hokkaido University of Education Graduate School of Education

*Department of Art Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概　要

2019年12月から流行した新型コロナウイルス感染症により日本でも緊急事態宣言が繰り返される中，著者が勤務する私立高校でも美術科の授業時間数が例年と比較して全学年で約９時間分（約15％）の減少が確認され，学校行事の中止・延期が繰り返された。本研究では高校生がコロナ禍によって受けた「学校生活での影響」や「美術科の授業に関する影響」について７件法によるアンケート調査で実態を掴み，普段の授業では読み取ることのできなかった生徒の認識について明らかにした。調査対象は筆者が勤務する高校の生徒61人（男子30人，女子31人）であり2020年度の１年間で起こった変化を明らかにした結果，生徒の欠席や遅刻が増加しており，生徒は美術の授業で起こった変化よりも学校生活に及ぼした変化を敏感に感じ取っていることが分かった。加えて，生徒は減少した美術の授業時数についてはあまり認識していない一方で，授業数が減ったことについては残念に感じており，やり残した課題に取り組みたかったと全体の40％の生徒が回答した。

Ⅰ　はじめに

2019年12月頃から中国武漢をはじめとして流行した新型コロナウイルス感染症の影響により，2020年には日本各地でも蔓延防止策として緊急事態宣言が繰り返されると共に学校では休校や時間短縮授業といった対応に追われた。筆者が同年より美術科の非常勤講師として勤務を開始した高校では４月・５月は休校措置となり授業を実施せず，６月の初週から時間短縮で授業を再開した後も学校行事の延期や中止によって授業の展開が不規則となり学校生活が一変した。こうした１年間

の出来事を振り返ると，今回のコロナ禍ではまさに生徒たちにとって学校の内外を問わず生活の価値観の揺らぎや変化があったことは想像に難くない。

そこで本稿では，まず高校生のコロナ禍・緊急事態宣言下における学校生活と美術科に対する認識についての調査を行い，その結果から普段の授業では感じ取ることができなかった生徒の美術科に対する認識について分析することとする。本稿の調査・分析によって，筆者自身を含めた教育現場の教員が今後の方向性を考える手がかりを見つけることができればと思う。

Ⅱ　学校生活と美術科に対する認識についての調査

Ⅱ－１　調査の目的

調査では「学校生活の変化に対する認識」及び「美術科の授業に対する認識」に関する２つを設定し，全国の学校に休校が要請される中，休校や時間短縮授業の実施があったことから仮説①「生徒は学校生活が変わったと感じている」，美術が日頃コア科目と認識されることなく，重要度の認識も低いことから仮説②「生徒は美術科の授業についてコロナ禍以前と変わったと感じない」を立て，７件法と自由記述による全31項目の質問により調査を行った。

Ⅱ－２　調査の対象

今回の調査は2021年10～11月に実施しており，対象者は筆者が勤務している私立高校の２・３年生の生徒[1]（合計61人：男子30人・女子31人）である[2]が，回答した生徒たちは2020年当時に１・２年生だった生徒である。

Ⅲ　コロナ禍と緊急事態宣言下における美術科の時間数変動

コロナ禍に突入し緊急事態宣言の発令を受けて全国の学校では休校が要請され，筆者が勤務する高校でも休校・時間短縮授業の実施で対応することになり，結果的に美術科の授業時間数にも影響を及ぼした。そこで，2020年度における各学年の美術科の合計授業時間数を算出して表１に示し，2019年度の合計時間数の比較したところ全学年で平均約９時間分（15%）の授業が減少したことが確認できた。

表１）「コロナ禍・緊急事態宣言下での美術科の授業時間数の変動」

令和２年度（2020年度）	予定された時間数（最も多いクラスで）			変動した時間数（最も多いクラスでの実際）		
	１年生	２年生	３年生	１年生	２年生	３年生
４月	4	4	4	0	0	0
５月	6	6	6	0	0	0
６月	8	8	10	7	7	7
７月	6	6	6	8	8	8
８月	4	4	4	4	6	4
９月	4	4	4	6	6	6
10月	8	8	8	4	6	6
11月	6	6	8	4	8	8
12月	4	4	4	8	6	6
１月	4	4	4	4	4	4
２月	6	6	0	4	4	0
３月	2	2	0	2	0	0
合計時間数	62	62	58	51	55	49
合計授業日数	31	31	29	25.5	27.5	24.5

1　筆者が勤務する高校の特徴として進路に合わせたコース制度があり，生徒は入学・進学時に３つのコース（総合・進学・特別進学）から１つを選ぶ。１年生はコースに関わらず全生徒が芸術科目を履修するが２・３年生になって「進学コース」・「特別進学コース」を選んだ生徒は芸術科目が時間割から無くなり，美術科を３年間履修するのは「総合コース」のみとなっている。

2　2020年当時に３年生だった生徒はすでに卒業しているため，在校生である当時の１・２年生（調査時点では２・３年生）とした。

しかし，１年間で起こった時間数の減少は年度開始時点で予定された結果ではなく，学校再開後の休校により授業が行えない場合や，学校行事を延期しながら実施の見通しも立てられず結局学校行事が中止となって急に授業が増える場合も含まれている。そのため，実施された授業において題材毎で生じた非対面授業への変更を含めて，あらかじめ配分された時間数の減少と題材の追加（時数の変動の右欄【課題】に記載）がさらに加わっている（表２）。[3]

表２）「学年による年間指導計画の変動」

１年生			
題材	A　色相環・鉛筆グラデーション		
	B　色面分割		
	C　鉛筆デッサン		
	D　油彩・静物画		
時数の変動	A	10→７	【課題】 素描課題×２
	B	14→10	
	C	12→10	
	D	26→24	
２年生			
題材	A　絵本づくり		
	B　抽象彫刻制作		
	C　油彩・自画像		
時数の変動	A	20→15	【課題】 抽象彫刻の感想シート・絵本のアイデアスケッチ
	B	22→18	
	C	24→22	
３年生			
題材	A　ゾートロープ		
	B　ユニット折り紙		
	C　グリーティングカードのデザイン		
	D　油彩・風景画		
時数の変動	A	９→６	【課題】 身近な物のリデザイン・ゾートロープのアイデアスケッチ
	B	16→13	
	C	８→８	
	D	25→22	

Ⅳ　コロナ禍と緊急事態宣言下が生徒に与えた影響について

問１～14を「学校生活の変化に対する認識」に設定し，７件法（１．全く変わらない　２．変わらない　３．やや変わらない　４．どちらでもない　５．やや変わった　６．変わった　７．全く変わった）と自由記述による調査を行った。

Ⅳ－１　年代別のジャンル分けと相違について

まず，設定した仮説①「生徒は学校生活が変わったと感じている」を検証するための質問項目を表３に示し，平均得点と標準偏差を表４に示した。

表３）「学校生活に関する質問」

番号	質　　問
問１	コロナ禍と緊急事態宣言下によってあなたの学校生活は変わったと思いますか。
問２	あなたの学校生活が変わったことについて良かったと思いますか。
問３	あなたの学校生活が変わったことで困りましたか。
問４	１～３の質問に関して，どうしてそう思いましたか。（自由記述）
問５	コロナ禍と緊急事態宣言下によってあなたの学習への取り組み方は変わったと思いますか。
問６	どのように変わりましたか。（自由記述）
問７	コロナ禍と緊急事態宣言下によってあなたの学習時間は変わったと思いますか。
問８	どのように変わりましたか。（自由記述）
問９	コロナ禍・緊急事態宣言下の影響によって，あなたは遅刻することが増えたと思いますか。
問10	コロナ禍・緊急事態宣言下の影響によって，あなたは早退することが増えたと思いますか。
問11	コロナ禍・緊急事態宣言下の影響によって，あなたは欠席することが増えたと思いますか。

3　年間のカリキュラムとして，１年生は絵画を中心として２年生では絵画・彫刻・デザインをバランスよく盛り込み３年生では絵画とデザインにゾートロープを取り入れた構成であることは変動後も大きな変わりはなく，変動したのは各題材に割り当てられた時数と授業内で指導内容についてのみであった。

問12	９～11の質問に関して，どうしてそう思いましたか。（自由記述）
問13	コロナ禍・緊急事態宣言下の影響によって休校になった時，学校に来られないことに困りましたか？
問14	それはどうしてですか。（自由記述）

表４）「学校生活に関する質問の平均得点と標準偏差」（n＝61）

質問	平均値	標準偏差	質問	平均値	標準偏差
問１	5.62	1.40	問９	2.10	1.38
問２	3.66	1.45	問10	2.11	1.52
問３	4.51	1.39	問11	3.34	1.91
問５	3.28	1.52	問13	3.11	1.65
問７	3.02	1.44			

学校生活に関する問いについて被験者内分散分析を行った結果（$F_{(8,480)}=39.51$，$P<.01$）であり，問１「コロナ禍と緊急事態宣言下の影響によって学校生活は変わったと思うか」の平均得点が最も高く「変わったと思う」と回答した割合が全体の86％だった。この結果からほとんどの生徒が学校生活の変化を実感していることが分かり，理由として自由記述の回答からはやはり感染予防のため校内でのマスク着用がほぼ義務化したことや，休校・時間短縮授業が実施されたことを挙げていた。その次に問３「学校生活が変わったことで困ったか」であり，問２と問５，問７，問11，問13に統計的有意差はなく，問９，問10の平均得点が最も低い結果であり，生徒たちは学校生活が変化したことについて「どちらかと言えば困っている」と感じており，そのような状況を「どちらかと言えば良くない」と思っていた。

一方，問５と問７の個別の学習面についての取り組み方では「変わった」が25％，学習時間では「変わった」が18％であったことから，半数以上の生徒が影響を感じておらず，20～25％の生徒で影響を感じていたことが分かった。

さらに問９・10・11では「コロナ禍と緊急事態宣言下の影響で「遅刻」・「早退」・「欠席」の回数が増えたと思うか」を問い，被験者内分散分析の結果（$F_{(2,120)}=20.35$，$P<.01$）から，欠席回数が増えたかについて最も高い値となった。「欠席が増えたと思うか」の回答では，約４割の生徒が「欠席は増えた」と回答し，その理由については「軽い頭痛や微熱でも万が一のため休むことが増えた」「家族の熱や風邪で休まなくてはならなくなった」ことが挙げられ，生徒自身がコロナウイルス感染症による影響を身近に感じていると推察できる。そして「遅刻」・「早退」については共に約10％が「増えたと思う」と回答し，これについて自由記述の回答を見ると「熱が出ると心配になる」・「時間にルーズになった」・「学校の休みが長くて慣れるのに時間がかかった」とあり，体調不良による影響と生活習慣が乱されたことによる影響も考えられ，「欠席」と比べて割合は低いものの，学校生活の一部として「遅刻」・「早退」の面でも生徒に与えた影響があったと言える。

最後に，問13「学校に来られないことに困ったか」では，25％が「そう思う」と回答し，その理由として「友達に会いたかった」「友達ができるか不安だった」「休みが長くなって勉強のほうが不安だった」が挙げられ，学校での人間関係に多く不安を抱く傾向があり，その次に勉学についての不安を感じていたことが分かった。

Ⅳ－２　学校生活に関する影響についての男女比較

上記で分析した質問の回答結果について，男女間に相違があるかを調べるために，問１～14まで（自由記述を除く）の男女間の平均得点と標準偏差を表５に示し，男女間の１要因参加者間分散分析を行った。その結果，問９「コロナ禍・緊急自体宣言下の影響で遅刻が増えたと思うか」についてのみ有意傾向が見られ（$F_{(1,59)}=3.59$，$P<.10$），他の項目では男女間の統計的有意差はなかった。つまり，男子の方がコロナ禍の影響でやや遅刻することが増えたと思っていることがわかり，他では男女間の相違は見られなかった。

表５）「学校生活に関する結果の男女比較」（男＝30・女＝31）

	性別	平均値	標準偏差
問１	男子	5.70	1.13
	女子	5.55	1.62
問２	男子	4.17	1.61
	女子	4.52	1.24
問３	男子	4.47	1.12
	女子	4.55	1.60
問５	男子	3.43	1.38
	女子	3.13	1.62
問７	男子	3.20	1.38
	女子	2.84	1.48
問９	男子	2.43	1.45
	女子	1.77	1.21
問10	男子	2.43	1.67
	女子	1.81	1.28
問11	男子	3.67	1.78
	女子	3.03	1.98
問13	男子	3.03	1.62
	女子	3.19	1.67

Ⅴ　コロナ禍と緊急事態宣言下が美術科への認識に関する影響について

次に，問15～31を「美術科の授業に対する認識」として設定し，７件法（１．全く変わらない　２．変わらない　３．やや変わらない　４．どちらでもない　５．やや変わった　６．変わった　７．全く変わった）と自由記述による調査を行った。

Ⅴ－１　美術科への認識に関する影響について

美術科の授業に関する調査では，設定した仮説②「生徒は美術科の授業についてコロナ禍以前と変わったと感じない」を検証するためための質問項目を表６に示し，平均得点と標準偏差を表７に示した。

表６）「美術の授業に関する質問」

番号	質　　問
問15	コロナ禍と緊急事態宣言下によって美術科の授業時間数が変わったと思いますか。
問16	実はコロナ禍と緊急事態宣言下の影響で，美術科の時間数は平均で学年ごとに約９時間（15%）減りました。それに気づきましたか。
問17	コロナ禍と緊急事態宣言下の影響で美術科の時間数が減ったことについてあなたは良かったと思うか。
問18	コロナ禍と緊急事態宣言下の影響で美術科の時間数が減ったことについてあなたは困りましたか。
問19	コロナ禍と緊急事態宣言下で美術科の時間数が減ったことについてあなたは残念に思いますか。
問20	コロナ禍と緊急事態宣言下によって美術科の時間数が減ってから，あなたはできなかった分の美術の制作をやりたいと思いましたか。
問21	コロナ禍と緊急事態宣言下の影響で美術科の時数が減り，一方で学校祭や修学旅行の延期・中止で時数が増えるなど時数の変動がありました。これについてどのように思いましたか。
問22	この時間数の変動によってあなたは困りましたか。
問23	この時間数の変動という学校の対応についてあなたは納得しましたか。
問24	コロナ禍と緊急事態宣言下の影響で美術科の授業や課題に取り組むモチベーションの維持はできましたか。
問25	時間数の変動によって，美術科の授業や課題に取り組むモチベーションの維持はできましたか。
問26	時間数の変動によって，美術科の課題や授業の内容が増えたり減ったりしたと思いますか。
問27	実際に課題は増えて，対面授業での内容は一部減りましたが，それに気づきましたか。
問28	時間数の変動によって，美術科の課題や授業の内容が変わったことにどう思いましたか。
問29	時間数の変動によって，美術科の課題や授業の内容が変わったことに困りましたか。
問30	2020年４月～５月までの間は非対面の授業が行われ，教科毎に動画配信（YouTube）や紙の課題が配布されましたが，美術科の課題は紙の資料のみでした。資料として動画があったほうが良かったと思いましたか。
問31	どうしてそう思いましたか。（自由記述）

表7）「美術の授業に関する質問の平均得点と標準偏差」（n＝61）

質問	平均値	標準偏差	質問	平均値	標準偏差
問15	4.00	1.64	問23	4.18	1.25
問16	3.54	1.78	問24	4.23	1.37
問17	3.41	1.27	問25	4.36	1.39
問18	3.75	1.42	問26	4.26	1.10
問19	4.31	1.49	問27	3.30	1.47
問20	4.18	1.47	問28	3.82	0.82
問21	5.20	1.44	問29	3.33	1.08
問22	3.69	1.41	問30	3.97	1.50

美術科への認識に関しての被験者内分散分析を行った結果（$F_{(15,900)}=8.27$，$P<.01$）であり，問21「コロナ禍の影響や学校行事の中止による授業数の増減についてどう思うか」の平均得点が最も高く，この結果から生徒たちは日々の授業数が定まらないという変動（増減）を否定的に受け止める結果となった。また，問17，問27，問29に統計的有意差はなく，平均得点が3.30から3.41と低く，その他の項目には統計的有意差が見られなかった。

まず，問15と問16における被験者内分散分析の結果（$F_{(1,60)}=5.71$，$P<.05$）では統計的有意差が見られ，生徒たちはコロナ禍と緊急事態宣言下の影響で美術科の授業時間数が「どちらかと言えば減った」と認識し，実際に起こった変動について正確には気づいていなかったことで予想の範囲内の結果となった。

続いて，問17から問20までは被験者内分散分析に統計的有意差が見られ（$F_{(3,180)}=14.85$，$P<.01$），美術科の授業時間数が減ったことについて問19と問20が問17と問18より平均得点が高い結果となり，生徒は美術科の授業時間数が減ったことについて良くない（41％），残念に思う傾向（44％）があり，積極的ではないが授業時間数が減少してできなかった分の制作を「どちらかと言えばやりたい」と思う傾向が見られた。一方，美術の授業時間数が減ったことにはそれほど困ってないと感じていた。

次に「学校行事の中止による授業数の増減」などの変動に関する質問である問21～23まで被験者内分散分析を行ったところ統計的有意差が見られた（$F_{(2,120)}=19.70$，P＜.01）。

この中で最も得点平均が高かったのは問21の「授業数の増減についてどう思ったか」であり，次に問23の「学校の対応に納得できたか」が高く，最も平均得点が低かったのが問22の「時間数変動で困ったか」であった。

つまり，生徒たちは日々の授業数が定まらないという変動（増減）自体にかなり否定的であるものの，学校の対応については「どちらかと言えば納得した」と認識していたことが分かる。一方で美術の授業時間数が変動したことについてはそれほど困っていないことが分かった。

次に，授業時間数の変動により起こった「授業や課題内容の変動」に関しては問26～29までの被験者内分散分析の結果（$F_{(3,180)}=14.78$，$P<.01$），問26・28の間，また問27・29の間に平均得点で統計的有意差がなく，問26・28が問27・29より高い結果となった。つまり，問26「時間数の変動で授業や課題の内容が変動したと思うか」では「どちらかと言えば変動した」と感じ，問28「時間数の変動により課題と授業内容が変動したことにどう思うか」では，「どちらかと言えば良くない」と思っていた。

一方，問27では半数以上の生徒が変動に気づかず，問29「時間数の変動によって課題と授業内容が変動したことに困ったか」では「どちらかと言えば困らなかった」と回答した。この結果から，生徒たちは美術科の授業時間数の変動やそれに伴う授業や課題内容の増減・内容の変動についてはそれほど困っていない結果となった。

最後に，問30「休校中の課題では映像資料があった方がいいと思うか」の回答割合は「そう思う」が28％，「どちらでもない」が39％，「そう思わない」が33％となった。「そう思う」と回答した生徒の自由記述では「口頭で伝えた方が伝わることもあるから」・「プリントだけだと分かりづらかったから」・「イメージがわきづらい」とあり，「そう思わない」と回答した生徒からは「動画が

なくても進められた」・「資料で十分理解できた」とあった。つまり，自分の力で課題を解決できた生徒は映像資料を必要としなかったが，文章の説明で分かりづらいと感じた生徒は必要としたということであり，必要とした28％の生徒への支援として映像資料の用意については題材内容や指導者側の負担を鑑みて適宜検討する必要があると言える。

Ｖ－２　美術科への認識に関する影響についての男女比較

上記で分析した質問の回答結果について男女間に相違があるかを調べるために，問15～31まで（自由記述を除く）の男女間の平均得点と標準偏差を調べ，表８に示し，男女間の１要因参加者間分散分析を行った。その結果，問29「授業時間数の変動によって美術科の課題や授業内容が変わったことに困ったか」のみ統計的有意差が見られ（$F_{(1,59)}=4.93$，$P<.05$），女子よりも男子の方が困ったと感じていることが分かり，男子の方が女子よりも授業や課題の内容の変動をより嫌がっていたと言える。

表８）「美術科への認識に関する影響についての男女比較」

	性別	平均値	標準偏差
問15	男子	4.13	1.50
	女子	3.87	1.76
問16	男子	3.40	1.74
	女子	3.68	1.80
問17	男子	4.50	1.45
	女子	4.68	1.06
問18	男子	3.77	1.41
	女子	3.74	1.44
問19	男子	4.37	1.40
	女子	4.26	1.57
問20	男子	4.43	1.36
	女子	3.94	1.52
問21	男子	4.90	1.37
	女子	5.48	1.43
問22	男子	4.20	1.28
	女子	4.42	1.52
問23	男子	3.93	1.06
	女子	4.42	1.36
問24	男子	4.23	1.31
	女子	4.23	1.43
問25	男子	4.33	1.16
	女子	4.32	1.42
問26	男子	4.20	0.98
	女子	4.32	1.20
問27	男子	3.60	1.36
	女子	3.00	1.52
問28	男子	4.07	0.77
	女子	4.29	0.85
問29	男子	3.63	0.95
	女子	3.03	1.12
問30	男子	3.90	1.40
	女子	4.03	1.60

表９）「問29と相関が見られた質問項目」（女子）

	関連する問い	相関係数
問29	問１	0.433*
	問９	0.362*
	問11	0.509**
	問15	0.625**
	問16	0.468**

この問29について男女別に相関関係を確認したところ，男子の場合は問29と問28の間でのみやや正の相関（0.489**）が見られ，授業時間数が変わることによって起こる授業内容の変動について「困る」と感じた生徒は，その内容の変動も嫌がる傾向があることが分かった。

一方，女子の場合は，問29と問１・９・11・15・16との間で正の相関が見られた。そして問29と問15「コロナ禍の影響で美術の時間数が変わったと思うか」について最も強い相関が確認でき，次に問11「コロナ禍の影響で欠席することが増えたか」・問16「実際に授業が減ったことに気づいたか」・問１「学校生活が変わったと思うか」・問

９「コロナ禍の影響で遅刻することが増えたか」の順に相関が見られた。

つまり，男子は時間数の変動によって起こる授業内容の変動について「困る」と思う場合に内容の変動自体を「嫌がる」傾向があり，単的に授業内容のそのものの変動に敏感であったのに対し，女子が時間数の変動によって起こる授業内容の変動について「困る」と思う場合は美術の授業数が減少したことに気づくほか，学校生活に関する変化に気づくなど，多面的で全体的に困難さを感じたと言える。

表10)「学校生活と美術科の授業時間数の変化に関する比較」

質問	平均	S.D.
1	5.62	1.40
15	4.00	1.64

最後に，コロナ禍で生じた変化という点で，学校生活に関する問１と美術の授業に関する問15を比較したところ（表10），被験者内分散分析の結果から統計的有意差が見られ（$F_{(1,60)}=62.47$，$P<.01$），生徒たちは美術科の授業時間数の変化に比べて学校生活の変化をより強く感じ取ったことが分かった。

Ⅵ　考　察

2020年のコロナ禍の中で緊急事態宣言の発令を受け，全国の学校に休校が要請されると共に高校でも休校・時間短縮授業の実施で対応した結果，美術科の授業時間数にも影響を及ぼし，著者が勤務する高校では合計時間数の比較から全学年で平均約９時間分（15％）の授業が減少したことを確認した。そこで本稿では，2020年のコロナ禍・緊急事態宣言が高校生の学校生活と美術科の授業に対する認識にどう影響を与えたのかを明らかにするために，当時美術科を履修していた生徒61名（男子30名・女子31名）を対象として「学校生活の変化に対する認識」及び「美術科の授業に対する認識」に関する調査を行った。調査に当たって，全国的に休校が要請されて，筆者が務めている高校でも休校と時間短縮授業の実施があったことから，仮説①「生徒は学校生活が変わったと感じている」と，美術科が日頃コア科目と認識されることなく，重要度の認識も低いこと[4]から仮説②「生徒は美術科の授業についてコロナ禍以前と変わったと感じない」を立て，７件法と自由記述による調査を行った。

その結果，仮説①「生徒は学校生活が変わったと感じている」では，全体の86％の生徒は学校生活が変わったと回答し，ほとんどの生徒が学校生活の変化を実感していることから仮説が成立した。学校生活が変わったと回答した理由としては，感染予防のため校内でのマスク着用の義務化，休校・時間短縮授業の実施が挙げられた。また，今回の調査で「コロナ禍と緊急事態宣言下の影響で「遅刻」・「早退」・「欠席」の回数が増えたと思うか」についても約４割の生徒は「欠席は増えた」と実感していることが分かった。さらに，「学校生活の変化に対する認識」についての男女間に相違があるかを調べたところ，男子の方がコロナ禍の影響でやや遅刻することが増えたと思う傾向があり，その他に男女間の相違は見られなかった。

次に，仮説②「生徒は美術科の授業についてコロナ禍以前と変わったと感じない」では，約40％の生徒が美術科の授業に関する授業時数の減少に気づき，約40％の生徒が授業時数の減少について良くなかった・残念に思っていることから仮説が成立しなかった。また，今回の調査で「コロナ禍の影響や学校行事の中止による授業数の増減」について最も得点平均が高かったことから，単なる授業時数の減少ではなく，学校行事の中止などによる授業数の変動（増減）自体をかなり嫌がって

4　松倉泰介「教科の重要度分析による特別支援学校での美術意義」第18回日本感性工学会大会，2016年９月，P25

いること，それについてもどちらかと言えば困っていたことが分かった。

以上のように，仮説①「生徒は学校生活が変わったと感じている」は成立し，仮説②「生徒は美術科の授業についてコロナ禍以前と変わったと感じない」は成立しなかったと言える。

Ⅶ　終わりに

新型コロナウイルス感染症の影響により，2020年には日本各地でも蔓延防止策として緊急事態宣言が繰り返されると共に学校では休校や時間短縮授業など対応に追われた。本稿ではこのような１年間の出来事を踏まえながら，生徒たちの「学校生活の変化に対する認識」と「美術科に対する認識」について，美術科が日頃コア科目と認識されることなく重要度の認識も低いことから「生徒は学校生活ほどの強い変動を美術科では感じていないだろう」という前提から始まった。

そして今回の調査では，2020年度が学校行事だけでなく通常授業ですら１年間を通して不規則であったこともあり，生徒たちにとっては学校生活での楽しみも学習面でも満足できるものではなかったことを確認でき，予想通りに高校生は「学校生活の変化」を「美術科授業の変化」に比べてはるかに強く感じている結果となった。

しかし，今回のコロナ禍の中において高校生の美術科に対する認識について調査では，生徒は授業時間数の変動によって起こる授業内容の変動について否定的に受け止めると共に，美術の授業時間数が減少したことを残念に感じ，取り組めなかった分の制作もやりたかったと考えている生徒が全体の約40％を占める結果となった。つまり，厳しい状況下だった今回の調査結果から生徒は学校生活に関する影響のみならず，美術科の授業に関して生徒たちが学校で美術を学ぶこと・学べることについて期待していることが伺える予想外の嬉しい結果だと言える。

その他に，美術科への認識に関する男女の相違や，全国的な課題となった休校や時間短縮授業など対応のための非対面授業や映像資料による課題提供などについての意見も得られた。そのことから，日頃の美術授業では感じ取ることができなかった生徒の美術科授業に対する認識や今後の方向性を考える手かがりが得られたと言える。

2022年４月から実施される高校の新学習指導要領[5]における美術科では，その目標で新設された３観点に基づいて「美術に関する専門的な学習を通して，造形的な見方・考え方を働かせ，美的体験を豊かにし，美術や美術文化と創造的に関わる資質・能力を育成することを目指す」とあり，指導要領解説[6]からは「生徒が造形的な見方・考え方を働かせることによって，人生や社会の在り方を考え，問題を発見・解決し，新たな意味や価値を生み出す豊かな創造性の育成を目指す」ものとして，授業の中で生徒一人ひとりが制作を通して自らの人生や社会と関わる新たな価値観を見出していくことが期待されている。授業の中でこの目標を達成するためには，生徒たちが制作を通して題材やテーマについて自分なりの考え方や感じ方に気づき，それが価値観として作品に反映される授業づくりが必要だと筆者は考える。

本稿の調査結果においても，普段の授業（美術科）での変化を敏感に感じている生徒は学校生活の面でも同様に敏感である可能性が示され，これを逆に考えると授業でのポジティブな認識（授業に対する満足感）を持つことで学校生活に対する認識も好転させられる可能性があることが考えられ，美術科の授業内容を充実させることは一層期待されるだろう。

以上，本稿ではコロナ禍・緊急事態宣言下における高校生の学校生活と美術科の授業に関する認

5　文部科学省「高等学校　学習指導要領（平成30年告示）」平成31年２月，p453

6　文部科学省「高等学校　学習指導要領（平成30年告示）解説　芸術（音楽　美術　工芸　書道）編　音楽編　美術編」平成31年３月，p452

識について明らかにした。今後は，コロナ禍が落ち着いた状態での学校生活・美術科の授業に対する認識の調査と高校美術科の授業を充実させるための追加調査を行っていきたい。

引用・参考文献及び資料

1．松倉泰介「教科の重要度分析による特別支援学校での美術意義」第18回日本感性工学会大会，2016年９月，P25
2．文部科学省「高等学校　学習指導要領（平成30年告示）」平成31年２月，p453
3．文部科学省「高等学校　学習指導要領（平成30年告示）解説　芸術（音楽　美術　工芸　書道）編　音楽編　美術編」平成31年３月，p452

（大島　生己　大学院教育学研究科）
（李　　知恩　札幌校教授）